

横浜市立左近山特別支援学校 R04_学校評価報告書

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
「個別の指導計画」の活用 の促進	①「個別の指導計画」について、3観点に基づいた指導の目標や内容を確立し、共有を深めて指導支援にあたる。 ②児童生徒の個々の教育的ニーズを捉えた適切な学習支援を行うためのICT機器等の積極的な活用を進めるとともに、必要な支援を行うために教職員のICTスキルアップを図っていく。	①カリ・マネ要領に基づき、3観点を意識した授業実践の取組を進めた。継続的な取組によって確かな学びを深めていきたい。②担当児童生徒の教育的ニーズや必要な教職員のICTスキルを精選し、操作のマニュアル化やミニ研修会を開いて情報の発信を行い活用を促進した。	B
道徳教育、 自尊感情の育 成	①自尊感情や自己有用感、仲間意識の向上を目指し、学校生活全体を通じて、できる体験と認め合う体験を重視した指導・支援の充実に向けた取組を推進する。 ②左近山地域や居住地域とふれあう活動を大切にするとともに、地域の人のつながりや地域の社会資源を活用した学習を展開する。	①五感を使った体験的な活動などを設定し、自分自身を表現できる環境づくりを重視した取組を進めた。②道徳だけではなく教科横断的な取組により、児童生徒の道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることができた。地域の社会資源を活用して、更に充実していきたい。	B
食育、健康の 保持、身体 の動き	①食と自分の身体や健康についての理解を深められるように、栽培活動などの授業と給食とを関連付けた学習活動を行う。 ②教職員の「自立活動」に関する理解を深め、PT、OTからの指導助言を生かしながら、個々の身体や感覚の特性に応じた自立活動の指導の充実を進める。	①栄養に関する学習や授業で栽培した食材に触れたり給食で使用して食したりするなどの活動を通して食育活動を進めた。②PT等の専門職からの指導助言を得て、肢体不自由児への身体や動きの指導の基本と、児童生徒個々に応じた具体的な指導・支援方法を学び、指導にいかすことができた。	B
自分づくり教育 (キャリア教育)	①自分らしい生き方の選択・決定のために、個々の希望やニーズを踏まえ、可能性を広げる支援を行う。 ②保護者進路学習会の実施や福祉事業所動画の公開など本人・保護者のニーズに応じた進路に関する情報を適宜提供し、より良い進路支援に取り組む。	①個別の指導計画や進路面談に基づき、個々の実態に応じた校内・校外での実習を行い、進路選択に向けた支援を進めた。②進路学習会(5回)、生活介護や就労等の福祉事業所動画の公開などを通して、児童生徒及び保護者のニーズに応じた進路に関する情報提供を行うことができた。	B
いじめへの対 応	①教職員自身の人権意識の維持・向上のために、研修等を適宜実施する。 ②児童生徒の関係性等について、教職員が常に情報共有を図り未然防止の取組を強化する。 ③児童生徒があらのままの自分と他者を認めることができるような授業や指導・支援の在り方について、引き続き研究する。	①人権研修や日々の授業実践の中で、教職員の人権意識を高めることができた。②いじめ認知件数は0件だった。気になる児童生徒の早期発見と気持ちに寄り添った支援に努めることができた。③年齢や障害等が異なる児童生徒同士がともに学び合い認め合うことができる授業を研究した。	B
人材育成・ 組織運営(動き 方)	①人材育成指標を活用した本校のキャリアステージ研修により、教職員が相互に育て合う職場づくりを進める。 ②教職員が自身の目標と組織での役割を意識して職務に当たること、教職員の力量を向上させる。同時に、ICT機器を効果的に使用し、業務の効率化を目指す。	①メンターチームで学級経営や授業実践に係る研修を行ったが、チーム内にとどまる状況の改善は必要である。②各業務が整理されてきたが、担当者個々に頼る状況も残り、教職員の連携力を更に高めていくことが望まれる。業務上でのICT機器の積極的な活用を推進することができた。	B
センター的機 能の取組	①関係諸機関との連携を進めるとともに、小中高等学校への相談支援、研修の提供等をする。 ②副学籍校交流校へは、当該児童生徒の特性や支援等についての説明を丁寧に行う。また、必要に応じて、教職員や児童生徒に対して障害理解や人権にかかわる研修等の取組を進める。	①専任会やコーディネーター協議会の場を活用して、情報を共有することができた。ユニバーサルデザインについての研修を提供した(中学校1校)。②左近山ブロックの小中学校の職員が本校を見学し、今後の学校間交流に向けた話し合いを行った。副学籍校交流は、保護者や交流校との丁寧な相談のもとに、意義のある交流を行うことができた。	B
通学支援	①登下校支援のモデル校として、福祉車両の事業所及び特別支援教育課との連携を密にし、これまでの課題等の分析をしながら、安全・安心な通学支援体制について引き続き検討を進める。 ②スクールバス事業所及びスクールバス乗務員との連携を密にし、安全で確実な運行等についての検討を進める。	①特別支援教育課と積極的にコミュニケーションをとり福祉車両に係る現状や課題の共有に努めた。②通学支援担当部員が定期的に担当する車両の乗務員とコミュニケーションをとり、情報の共有・把握に努めた。また車両事故が起こった際の初動対応についての見直しを行った。	B
安全管理	①教職員の防災・防犯等の意識を高めるため、研修や訓練などを通して課題を分析しながら、安全な学校づくりを進める。 ②ヒヤリハット事例の分析から、教育活動でのリスクを低減する対策を構じていく。	①防災や防犯に関わる情報の発信を行うとともに、実技的内容を含めた研修を行い、課題の把握とスキルアップを進めた。②ヒヤリハット事例を蓄積・分析し改善案を考えて検討することができた。速やかに全職員で共有し、ヒヤリハットへの意識を高めるとともに再発防止に努めた。	B
地域連携	①地域行事等への教職員の参加、地域の方の学校ボランティアへの参画などの協力体勢を整えていく。 ②地域のサービス基盤の整備を進める役割を担う自立支援協議会に学校で把握した課題をもって参加する。 ③学校運営協議会等を通して、地域と共にある学校を目指し取組内容を検討していく。	①校外学習時に、学校ボランティアとして協力を得た。地域のお祭りへのPTA参加を企画した。②自立支援協議会に参加し、特に重症心身障害児者の課題について共有できた。③学校運営協議会の開催により、本校を地域の方々に知っていただく機会を得た。今後、地域との連携により教育活動の更なる充実を進めていきたい。	B
学校 関係者 評価	「重点取組分野」の各項目についての、具体的な意見等は特になかったが、今後の取組について、次のような意見をいただいた。 ●肢体不自由の特別支援学校で指導で重要な位置付けの一つとなるPT(理学療法士)、OT(作業療法士)などによる指導助言については、日々の指導の中で継続的に取り組んでいくために地域の中の関係機関を活用していくのも一つの方法ではないだろうか。学校・地域コーディネーターを活用して連携を考えていくことも可能と思われる。		
評価結果に 対する学校の 見解	開校2年目以降、コロナ禍の影響を受ける中でも様々な工夫をしながら教育活動を行ってきた。多くの制限があった状況から少しずつ制限が緩和される中で、距離を保ち短時間での交流ではあったが、本年度は小中学校との交流の取組を再開した。子どもたちがお互いを知り、理解し、お互いに関わる中で共生社会の実現に向けた一助としての取組を進めていきたい。また、学校間だけでなく、地域の方々や地域の関係機関等との連携も進める中で、本校の児童生徒にとっての教育の充実を進めていきたい		
中期取組 目標 振り返り	規模は縮小したものの「公開授業研究会」を実施することができたが、参加者との十分な協議の時間を確保することができなかった。教職員はカリ・マネ要領に基づき3観点を意識した授業実践を行いながら教育課程の編成を進めているが、自己完結して「井の中の蛙」となることのないように、外部からの多くの意見をいただきながら、児童生徒の学習活動がより充実したものとなるように堅実な取組を重ねていきたい。また「開かれた学校づくり」という観点からも、コロナ禍から脱却しつつある状況も踏まえつつ、学校間や地域、また関係機関との連携を深める取組を進めていきたい。		